

異文化間の自律的關係生成プロセスの記述における ソフトシステム方法論の応用可能性

—内部記述的視点からの考察—

Applicability of Soft Systems Methodology in the Description of
Autonomous Relationship-Building Processes in Intercultural Settings

—A Discussion from the Perspective of Internal Description—

河野 秀樹
(Hideki KOUNO)

Abstract :

This study discusses how Soft Systems Methodology (SSM) can function as a method of internal description of autonomous relationship-building and co-creation processes in intercultural settings based on the *ba* principle. First, internal description will be overviewed for its applicability for the description of the *ba*-based autonomous processes of relationship-building and co-creation. Since it is considered that the description of ongoing processes of *ba*-based relationship-building and co-creation are possible only from the perspective of a participant instead of an observer, it is likely that description of these processes has a high affinity for internal description based on internal measurement.

As a specific method of internal description of the *ba*-based relationship-building and co-creation, SSM will be taken up, and coherence between the principle of internal description and that of description practiced in SSM will be discussed to examine the effectiveness of SSM as a method of describing the *ba*-based relationship-building and co-creation processes. Finally, I will discuss the applicability of SSM as a method of describing the *ba*-based relationship-building and co-creation processes in intercultural settings in consideration of its advantages and limitations in its application to culturally diverse situations.

キーワード : 異文化間コミュニケーション、内部記述、場、ソフトシステム方法論

Keywords : intercultural communication, internal description, *ba*, SSM

1. はじめに

異文化間コミュニケーション研究において、個人および集団間の文化的差異とそれに起因する諸問題を主な研究対象とする従来の文化本質主義的アプローチに替わる、いかに異文化を結ぶかに焦点をあてた、いわば関係論的アプローチが求められるなか、創造性の源泉としての文化的多様性を担保しつつ異質な分子を包摂し、全体的文脈を自律的に形成するシステムの構築原理としての「場」の作用が注目されている。本稿では、多文化的に構成されるシステムにおける「場」による個人間の自律的關係生成と共創的文脈形成のプロセスの記述が「内部記述」としてなされるべきであることを明らかにしたうえで、その具体的方法として「ソフトシステム方法論」がいかに機能しうるかを、同方法論の多文化状況への応用にあたっての有効性および限界とあわせて考察する。

2. 文化的多様性を結ぶ原理としての「場」

これまで異文化間コミュニケーション研究においては、価値観や行動規範といった、文化の指標として特定された概念カテゴリーごとに自他の文化的差異を明示・認識することで、相互への理解が深まり、結果として異文化間の摩擦を回避・排除できるとする「異文化理解」型アプローチが実践的方略と結びついて広く称揚されてきた。一方で、こうした文化本質主義にもとづく文化差の知的理解のみでは、長期的かつ包括的な異文化間の関係構築や協働が求められる状況への対応には不十分であるとの指摘がなされている。⁽¹⁾ 河野（2013）は、こうした、対象化された他者の理解としての「異文化理解」にもとづく方略では関係構築における生成的視点が欠落しているため関係生成のダイナミズムを扱うことができないこと、したがって異文化間の共通の文脈形成や協働の成果としての創発的事象の生起のプロセスを記述することが適わないことを指摘する。そのうえで河野は、これに替わる異文化間コミュニケーション研究の方法論的視座として、コミュニケーションに関わる主体間の相互作用そのものに焦点を当て、現実の関係構築において文化的差異がいかに

に克服されうるか、さらに、多様性がいかに創造的協働に寄与しうるかを探ることが重要であるとの視点から、関係論的パラダイムに立った文化的多様性へのアプローチの必要性を提言している。

河野（2012）では、多様な個人や集団間の関係構築における、他者への知的理解のみによらない自律的な関係生成をとりもつ原理として、清水博の「場」の概念を援用し、異文化間で「場」的原理による関係生成と共創的文脈形成が起きていることを示唆する事例の存在が示されている。清水（1999）によれば、「場」とは、生命要素が自らを含む集団全体としての表現を創出すべく他の要素と互いに整合的な振る舞いを生み出していくうえで、個々の要素の振る舞いへの拘束条件としてはたらくマクロな秩序生成の作用である。⁽²⁾

清水は、「場」による全体表現の創出では、個々の構成要素の表現と全体表現のあいだ、および各要素の表現のあいだに、秩序だった全体表現を生むような整合性が成り立っていると、生命システムではこうしたマクロな秩序と要素間の整合的関係性が自律的に生成する点で、物質界一般にあてはまるエントロピー増大の法則に逆らったシステムの構成原理がはたらいているとする。清水はこうした特定の上位機関の関与によらないシステム内の関係生成を、拘束条件としての「場」のはたらきによる全体的秩序の自己組織として説明する。⁽³⁾ 清水（1996）によれば、こうした「場」を介した関係の自己組織の原理は生命要素としての人間のあいだにも適用されうる。すなわち、我々個々の人間も、他者と協働して全体表現としての集合的文脈を様々なレベルで創出していく方向付けられており、そのプロセスは「場」のはたらきにより、特定の個人や機関による恣意的はたらきかけを介在させずに、ちょうどそれぞれの役者が台本の与えられないまま他の役者との相互作用の中から自己の役割を定義し全体としてのストーリーを創り上げる即興劇のように、自律的に進行していく。こうした「場」のもつ自律的な関係生成と全体表現の創出作用は、人間の構成するシステム＝集団に関しては

全体としてのまとまりを生むような個々の構成員間の関係作り、さらには協働を通じた知識創造などの創発的行為の基盤となるものとして、上意下達によらない当事者主体の新たな組織経営の原理として応用されてきた。⁽⁴⁾

上述したように、河野（2012）では、そうした「場」的原理による関係構築と共創が異文化間でも起きうることが示唆されているが、その論拠として河野は、「場」の作用が特定の文化集団に限らず生命要素としての人間一般について適用されうるとの文脈で論じられていること、また、関係生成と共創をとりもつ「場」の情報がいわゆる暗黙知⁽⁵⁾として、非記号的な性格をもって個人間に授受・共有されるため、通常の記号を媒介とするコミュニケーションのように言語や文化固有のシンボル化の統語体系による制約を受けないことを挙げている。さらに、「場」の情報は自我的意識の関与しない暗在系を通じてやりとりされる⁽⁶⁾ため、恣意的働きかけを超えた作用を関係生成と共創にも及ぼしうる。ここに、異文化間をむすぶ関係構築と共創への新たな方法論が示唆されうるのである。

3. 自律的關係生成プロセスの記述に関わる方法上の問題

3.1 「場」の作用同定への従来のアプローチ

ところで、そうした異文化間での共創とその前提としての自律的關係生成のプロセスを記述するうえで、その方法論についてはこれまでのところ体系的な議論はなされていない。「場」の作用のもたらす関係生成及び共創に関わる効果の検証は、専ら該当するとみなされる事象の反省的考察に基づいてなされてきた。具体的には、企業体などの組織において、ボトムアップ型の自発的關係構築や、個々の当事者の主体的行動と相互作用の中からもたらされた知識創造などの創発的行為が組織としてのパフォーマンスの向上につながっているとみられる現場での調査を通じ、そのプロセスと効果に関わる要因を「場」理論の視点から特定しようとする方法が主に組織経営研究の分野でとられてきた。⁽⁷⁾「場」のはたらきをその産出物とみられる事象

のうちに同定しようとするこうしたアプローチの多くは質的データにもとづく定性的研究の形をとり、一般に質的データ分析の基本的手続きとされる、観察や聞き取り調査から得た記述によるテキストデータをその特徴ごとにコード化し、コード間の関係性のパターンを概念として抽象化したうえで、対象とする事象（「場」のはたらき）の概念モデルを構築し、これと関連理論との整合性を検証していく⁽⁸⁾というプロセスを辿る。例えば、Kono（2008）および河野（2012）では、日本人と米国人の職場における「場」的原理によるとみられる関係生成と協働を通じた共創に関し、当事者への半構造化インタビューによる口述データの解釈的分析から、そうした共創の存在を示唆する要素の特定を試みているが、対象へのこうした接近を基本にした実地調査から得られるのは、あくまで外部からの観察にもとづく事象についての記述であって、当事者の経験そのものの記述ではない。これは、参与観察を調査の方法とした場合でも避けられない事態である。それは、いかに当事者との緊密な接触の下に現場に寄り添った記述を行っても、調査者が当事者の経験を自分の経験として記述することはできないからである。この至極当然な事実は、特に「場」の研究においては方法論上の重要な問題を提起する。

3.2 「場」の作用の研究法への異なる視座

「場」の作用について具体的にどの事象のうちにその存在を認め、どのような尺度でその効果を判定するかについては未だ研究者の間に統一の見解は示されていないが、一般に、外部からの観察により得られる情報を研究の拠とするアプローチがとられる傾向がある。例えば、西口（2000）は、組織論における「場」の外貌の記述に関し、体系的な指標と測定方法の確立の必要性に言及したうえで、「場」の作用の記述にあたっては、その効果としての外的指標からその存在が確認できるとし、次のように述べる。

これは、例えば、砂丘の形態を観察することによって、はじめてそこに作用した風の力動

が間接的に把握できるようなものである。砂浜や干潮に残された血管模様や網状模様、また流水が泥に刻印したらせん形状を調べることによって、水の運動を「事後観察」する手法も同様の結果をもたらす。[中略]「見えない場」は、このような観察、指標化と測定手続きによって、可視的となろう。そして、このような客観化を通じてのみ、場の記述手段が整い比較可能性 (comparability) が生まれ、場理論のさらなる発展と応用が期待できるのである。⁽⁹⁾

上述したように、一般に「場」の作用に関する研究の多くは、定量的、定性的ともにこうした外延量の事後の観測にもとづく記録の分析に依拠してきたといえる。このような、調査者が、対象として特定された事象から独立した主体として事象についての記述を行うという観測の構図には、西原 (2010) が指摘するように、思惟する自我により客体視された対象をまなざすという主客二元論にもとづいて対象となる事象に規則性・法則性を見出そうとする近代哲学・科学思想の基本理念が、社会科学においても実証科学的な学理知を追求するうえで所与の前提とされてきた⁽¹⁰⁾ 経緯が背景として存在する。

一方、三宅 (2000) は、共創における「場」のはたらきの記述は、記述する者が当事者として共創のプロセスに関わっていくことによってはじめて可能となるとする立場をとる。三宅は、いくつかの主体が相互に関わり合うなかで共通の文脈性を生み出す空間である「共空間」を創りあげるプロセスを「共生成」と呼び、そうした共生成の可能性を「場」の作用と関連づけて論じている。三宅によれば、共生成による共空間の創出とは、そこに生まれる新たな文脈や機能の創出であるとともに、「互いの自己を共に創りあう」⁽¹¹⁾ 過程に他ならない。すなわち、共生成の当事者は、互いに行動的に関わり合うことで相手と共に自分自身も創られていくという、自己を発展的に更新していくプロセスに組み込まれることになる。その際、当事者間には自他非分離的な自己としての「場」が作用

し、これにより互いの内部状態が共生成に向け整合化されていくというのである。

三宅は、この共生成のプロセスの記述が、一般的な事象の「説明」とは異なった原理でなされる必要性を強調する。三宅によれば、文脈の共創である共生成とは展開の予測のできない無限定な現実の環境のなかで、「いま、ここ」において立ち現れる刹那の連続に即応するかたちで行われる「リアルタイムの創出」である。⁽¹²⁾ そこでは、当事者は「行為」を通して絶えず変化する生成プロセスそのものに関わっているため、同時にその仕組みを「説明」することはできない。そうしようとした時点で、自己が共生成のプロセスの外に置かれることになるからである。したがって、共生成の仕組みを理解することによって共生成そのものを捉えることはできないと三宅は主張する。⁽¹³⁾

4. 「場」における自己言及と内部記述

「場」の作用の記述に関わるこのような二つの立場の違いは、粗く表現するなら記述される事態に観察者として関わるか、当事者として関わるかの差により生じるが、記述の対象に関しても両者は異なっていると考えられる。すなわち、観察者としての記述により、「場」のはたらきが結果としてもたらしうる効果の存否とその全体文脈における意味を判定することができる一方、当事者としての記述では全体文脈の記述を志向することはできない反面、文脈の生成プロセスにおいて構成員間にどのような情報が授受・共有され、それにもとづいてどのような関係性が醸成されているかについてのリアルタイムの展開を、局所的な立場から自己の経験として語ることへの道が開かれる。内山 (2007) の表現を借りれば、前者は客観的な事実としてのリアリティ (reality) の記述であり、後者は「思い」を含む主観的事実としてのアクチュアリティ (actuality) の記述である。⁽¹⁴⁾

共創を取り持つ原理として「場」を論じた清水は、生物が行う共創のプロセスの記述には、個々の生命体の自律的な振る舞いの選択性を前提とする点で、一般的な物理科学の対象となる現象の記述とは異なった方法が求められると

し、外部からの観察のみによる客観的事実の記述だけでは同プロセスの記述が完結しないことを指摘する。清水（1996）によれば、あらゆる階層の生命システムを構成する生命要素は、システム内における自己の固有な性質および機能を自律的に創出していく点で、一般物質の構成するシステムの構成要素と大きく性格を異にしている。すなわち、あらゆる生命要素は、自らの属すシステムの表現の生成に寄与するなかで自己とシステム全体との関係に立って自らを定義しているというのである。⁽¹⁵⁾ ところで、生命要素がこうしたシステム全体の方向性、さらにはシステム内の他の要素の振る舞いと整合的となるよう自己を定義していくには、先述したように自己の振る舞いの選択に方向性を与える一定の拘束条件が必要となるが、個々の要素によるこの拘束条件の生成と認知は、要素の振る舞い間の関係の分析的な把握からは、なされ得ない。そこには、個々の要素の性質の独自性、それらの間の関係性のネットワークの多重性、さらには、各要素及びシステムの状態が絶えず変化するという、無数の変数要因が存在し、操作情報としての拘束条件は線的なアルゴリズムにより導き出すことができない。清水は、こうした「場」の情報とは、対象化できない種類の情報⁽¹⁶⁾であり、その認知は各要素がその身を置く場所の状態の反映としての「内部状態」として、自らのうちに「映し出す」ことによつてのみ可能となるとする。具体的には、我々にとってこうした自己と関連づけられた場所の状態は、身体性、情意性を伴った自己の内部感覚となって自覚されるものであるため、「場」における自己組織的な関係生成と文脈形成としての共創の過程は、自他分離的な近代科学の手法ではとらえることができないことを清水は指摘している。⁽¹⁷⁾

清水のこうした指摘が示唆するのは、「場」の作用の記述にあたっては、それをもたらししている要素間の関係性の性格、および個々の要素とシステムの間を生じている動的な相互作用のプロセスを記述対象とするのであれば、同プロセスに身を置く内部者としての視点が求められるという命題である。このことは、清水の提唱

する生命関係学が、「関係と意味の科学」を標榜するものであり、「常に現場に立ってその豊富な現実から学び、知識を、実践を通じて現実の場に生かすことによって、その正しさを確かめる」⁽¹⁸⁾ことをその基本的方法とする「場」理論の視座から必然的に導き出された方向性である。

本稿は、稿者が河野（2012）で行った異文化間での「場」的原理による関係生成への外部者としての諒解から一歩進んで、異文化間の関係生成と共創が辿るプロセスに「場」の作用がいかに関与しうのかを記述する方法論上の視座を確保するとともに、その実践的応用への可能性を探ることを目的とするものである。このことから、本稿では、そうした動的プロセスをとらえるためには内部者・当事者としての視点からなされる「場」の作用の記述が必要であるとする立場をとることとする。そこで以下では、「場」における内部者としての生成プロセスの記述を可能にする視点と方法とは具体的にいかなるものかについての試論として、内部記述法としてのソフトシステム方法論の提示する記述に関する方法と、「場」における自律的關係生成の性格との関連性を照査しながら、異文化間における関係生成の原理としての「場」の記述における同方法論の有効性と限界について考察する。

5. 内部観測にもとづく内部記述の意味

5.1 内在的視点の意味の不明確さ

前節で論じたように、「場」の作用の複雑かつ可変的な性格から、「場」を介した関係生成のプロセスの記述にあたっては内部者の視点からの記述である「内部記述」が有効であることが推知されるが、その具体的方法論のあり方を探るに先だってそもそも「内部記述」とはどのようなものかについて整理しておきたい。

対象となる社会現象の記述にあたり、それを内から見るか、外から見るかについては、既に emic（文化内在的）なアプローチと etic（文化外在的）なアプローチの概念区分が人類学や社会学で広く適用されている。⁽¹⁹⁾ 前者が対象となる社会文化現象についての、当事者の概念的

枠組みに沿った行動や言葉の内在的な意味に関する記述を指向するのに対し、後者では現象の記述を研究上共有可能な文脈に位置づけるために、通文化的に適用可能な説明概念に依拠する立場をとる。emicが当事者と同等の立場から現象を観測する点で、その記述を「内部記述」と形容することに問題はないが、同概念は記述者のまなごしのベクトルを特定すること自体にその意義が帰結される点で、社会現象のメカニズムを具体的に記述していくうえでの有効な方法論を導出する力を持っていない。問題は、そうした内部者の視点とは対象とのどのような関わり方から生じるものであり、関わりそれ自体を記述していく方法とはどのようなものかについての有為な指標と処方はいかに産出するかである。これに答える手がかりとしての「内部記述」のあり方について、「内部観測」の概念がその意味の措定への有効な道筋を与えるものと考えられる。

5.2 内部記述をもたらす内部観測の原理

複雑系における要素間の相互作用のような、外部からの観察のみではその構成の性格と生成プロセスを説明できない現象の記述法として、松野（2000）は「内部観測」⁽²⁰⁾ にもとづく「内部記述」の有効性を説く。松野は内部観測の説明を、次のような定義をおくことから始める。

経験は間断のない観測から成り立つ。その観測は経験世界の内部のみから生じてくる。経験世界内に現れる個物は何であれ、他の個物と関係を持つとき、相手から受ける影響を特定できる限りにおいて、その相手を同定する。しかも相手を同定する、とする観測はこの経験世界の内で絶えることがない。何が何を観測しようとも、その観測は後続する、果てしのない観測を内蔵する。これを内部観測という。⁽²¹⁾

松野によれば、あらゆる相互作用には、この観測者による案件の同定、すなわち問題となる案件を「見定めること」がまず起きている。松野のいう「観測」とは、記述する案件を設定す

る作業に必然的に伴うこの「他ならぬその案件を特定する」⁽²²⁾ 操作である。この特定過程としての内部観測を、松野は「説明」とは異なるものとして区別する。すなわち、「説明」が答えを与えるものであるのに対して、「観測」は問題そのものを与えるものであり、内部観測と外部からの観測を分けるのは、内部観測が観測者の個別・具体の経験のみからもたらされるという事実による。つまり内部観測とは感官を通じ観測者が世界との相互作用から生じる強度を感受することで相手を同定し、まさにそのことにより自己と環境とのあいだに境界を形成する際限のない「行為」そのものを指すのであり、その意味でものごとの説明原理とは異なるというのである。⁽²³⁾

5.3 「場」の生成原理と内部観測理論の整合

この内部観測に従属する記述である内部記述が、完了することのない内部観測運動と相即するものであることを松野は強調するが、この間断なく続く内部観測という運動についてのオンゴーイングな記述である内部記述は、文法に照射すれば「経験を進行させる運動に最も密着した記述様式」としての現在進行形で表される種類の記述となる。⁽²⁴⁾ この内部観測行為の進行形による記述は、ある運動を「している、しつつある」観測者だけでなく、同じ状況を共有する複数の行為者が参加可能となる、能動でも受動でもない、いわば「中間態」の記述を許容する。⁽²⁵⁾ このことは、内部記述が、ある文脈を共有する個々の行為者の経験の生成の記述と、システム全体の文脈とを接続する道を開くものであると松野は指摘する。その概略は以下のように説明される。

松野によれば、複数の行為者により共有される文脈は、それが事後的に確定した時点では外部記述の対象となり、その中で起きる個別の出来事は、統語論的統一をその成立要件とする外部記述を支える要因となる点で、「個別からの普遍化」への志向をもつ。これに対して、内部記述では事態は逆になる。すなわち、内部記述では、与えられた普遍的統整原理を満たすべく行われる内部観測に支えられた個別な行為の記

述により、「普遍からの個別の生成」⁽²⁶⁾が起きるのである。このことは、松野の言うように、文脈に行為の原因性を求めることに他ならない⁽²⁷⁾が、こうした機械論的原理によらない因果律の生成に関し、松野はその様態を次のように描く。

ここに一つの物語を想定してみる。登場するものは誰しも、相手がこれから何をするのかその全てを前もって見通すことが出来ない。だが、皆が周りの動きを見ながら自分の動きを決めることのできる行為者であるとする。[中略] その舞台の上では、あるまとまりのある物語が進行する。登場者が直ぐさま舞台から消え失せてしまうのでない限り、我々はこのまとまりのある物語を成り立たせるために欠くことの出来ない役者になる。自分の行動が後で自分は何をもたすかが定かでなくとも、行動を起こすことが出来る、とするのがここでの基本である。この役者の動きを克明に書き綴って行くと、それぞれが局所視野しか持ち得ないにも拘わらず、結果としてまとまりのある全体に向かって内部から参加してきたのが判明してくる。完了形で言い表せる事態はそこに含まれる参加者がそれまでに共同して成し遂げてきた、まとまりのある一つの全体である。これが記述を経由して内部観測がもたらすことになる統語論の統一である。⁽²⁸⁾

外部記述の依拠する機械論的原理とは相容れない、この目的因としての統整原理の許容により、内部記述は因果律の適用範囲を著しく拡げる効果を持つが、そのことは「今までに経験したことのない複雑さの容認」⁽²⁹⁾へとつながると松野は述べる。この「複雑さ」は、外部記述の記述対象の普遍性と矛盾しないだけでなく、「諸々の創発、起源をもたす」⁽³⁰⁾ものである。

上に引用した松野の「物語」についての記述は、清水の「場」を介した共創の即興劇モデルとその成立の原理を同じくする。つまり、「場」による共創とは、個々の構成要素が「場」を通じて感じ取ったシステム内の状況を内部観測と

して自己の内に映し出し、他の要素との関係を整合させながらその都度記述した観測内容に合うよう選択的に行為に移していく局所的運動の結果としてもたらされる統整原理としての共通の文脈の形成と更改の過程に他ならない。そのときの個々の経験と関係性の生成プロセスの記述は、外部記述ではなし得ない。システム内部で重層的に繰り広げられる生成過程の複雑性を許容する内部記述のみがこれを可能にするのである。

6. 「場」における生成プロセスの記述法としてのSSM

6.1 「場」による生成プロセスの記述としての内部記述の非確定存在論的性格

前節までで、「場」による関係構築と共創に関わる生成プロセスの記述が内部観測に基づく内部記述のかたちをとることを必要とすること、そのためには記述者（の少なくともひとり）である研究者は当事者として「場」の作用に内包され、行為者として経験の生成に立ち会うなかで状況の記述を行う必要があることを示した。ただし、このことは、研究者が研究者としての役割を放棄することを必ずしも要求しない。

出来事を内部記述することは、記述が拠って立つ内部観測がその出来事に関わる他の行為者の観測と同時進行することを前提とする。その際に記述されるのは、個々の行為者による出来事についての個別の内部観測の内容である。これは、ある者が他の者の行為を記述する際にも当てはまる。つまり、他の行為者の行為を記述するときでも、我々は観測者として内部からそれをまなざす⁽³¹⁾のであり、この意味で、内部記述に携わる研究者は、研究者としての視点を維持しながら、複数の者によって同時に行われる内部観測にもとづく経験生成のプロセスに自らの内部観測を通じて関わっていくのである。しかも、間断無く相互に影響し合う多数者の内部観測の連鎖に取り込まれることにより、研究者自身もその集合的文脈形成に必然的に参加することとなる。⁽³²⁾

ところで、内部記述の機能的特徴を、松野

は、内部記述者にとって記述対象は「対象として存在しながらも、事前にその対象は特定されていない」⁽³³⁾として説明する。これは、内部記述者が対象を事前に特定しうらば、それは外部記述になってしまうからであり、「語るべき対象の存在を認めながら、事前にはそれを特定し得ないとする不確定存在論の擁護」⁽³⁴⁾が内部記述成立のための一つの必要条件となる。辻下（1998）は内部記述のこうした性格をもたらし内部観測の機能上の性格を、次のように描写する。

内部観測では、観測対象についての予断がないこと、対象が何かということさえ確定していないこと、観測結果が自分に属するのか対象に属するのかわからない、さらに、観測結果が何かということについても定かでない、そういった様相がある。⁽³⁵⁾

ここから見てとれるように、内部記述に先立つ内部観測とは、ものごとが説明可能な概念的表象として立ち現れる以前の、環境に存在する何らかの作用（強度）の検知のプロセスであり、対象の認識を支えるある自律的な動きであると考えられる。このことは、「場」の情報が直接知覚の対象とならない直感や情意を伴う心的現実として自覚されるという、「場」を介した状況把握のメカニズムと論理上整合する。つまり、「内部観測」とは、「場」の情報が身体を介した状況の直接的覚知となって自覚されるとする、清水のいう「場」の情報が自己の内部に「映し出される」⁽³⁶⁾プロセスと機能的に等価であるといえる。「場」の作用の個人による認識およびそれがもたらす共創を通じた文脈形成のあり方は、対象化も予測もできない点でこうした内部観測の性格をつぶさに示している。この確定存在論を排した相互作用の記述を許容する方法論の一つに、ソフトシステム方法論があると考えられる。

6.2 ソフトシステム方法論の成り立ちと理論的基盤の概要

ソフトシステム方法論（Soft Systems

Methodology 以下、SSMと表記する）とは、1970年代に「ハードなシステム理論」の限界を克服する方法論として、英国のシステム科学者P. Checklandにより創始されたアクションリサーチ⁽³⁷⁾の一形態である。内山（2007）は、Checklandの理論を日本的文脈から再解釈し、「コトの学」⁽³⁸⁾としてのSSMを実践的側面と絡めて論じているが、内山によればSSMとは、当事者が問題と思われる状況に改善をもたらすために、その状況にかかわっている人々のあいだに、原則として終わることのない学習サイクルを活性化させる方法論である。⁽³⁹⁾

SSMが生まれる背景にあったのは、上述のように、システム学者および実践者による従来のシステム方法論である機械論的システムモデルの適用上の限界の認知であった。「ハードな方法論」として形容される従来のモデルは、一般に現実の近似解をシステムモデルに写像し、自明な目的の達成のための効率的手段を探すという手法をとって、オペレーションズリサーチ（OR）、システムアナリシス（SA）、システムズエンジニアリング（SE）などに应用されてきた。⁽⁴⁰⁾ こうしたハードな方法論は、作業の目標が当事者にとって明確で、したがってそこに行き着くまでの手順が予見可能な案件に関しては有効に機能する。そこでの関心はいかに作業効率を最大化するかであり、そのための手段の取捨選択が重要案件となる。

一方、社会問題やマネジメントなど、一義的に問題の定義や目的が設定できないような種類の問題にはこうした手法は必ずしも効果的には機能してこなかったと内山は述べる。これらに共通した性格は、生き物としての人間の行動を扱う点で因果律による事態の展開についての予測がつかず、科学的実証主義が前提とする反復性(repeatability)の適用が能わないことである。⁽⁴¹⁾ つまり、人間の集団の活動を対象として扱う研究では、個人ごとに状況についての理解が異なるうえに情意的側面や集団内の関係性の変化など可変的要因が多く、初期条件からの分析・推測により目的への効率的道筋を示すようなモデルを設定することが困難である。したがって、そこでは自然科学におけるような反復可能性を

前提とした実証主義的な方法論に替わる、活動主体間の関係性とグループ全体の創発性を生成的視点から記述する方法論が求められる。ここで問題となるのは、個々の要素の性質とその集積という「モノ」レベルでとらえた現実（リアリティ）ではなく、システム全体としての⁽⁴²⁾生成プロセスへの構成要素の行為的関与によりもたらされる心的現実（アクチュアリティ）である「コト」レベルでの現実をいかにとらえるかである。こうした、社会的現実へのアプローチの転換を図るべく生まれたのがSSMであった。

内山によれば、SSMでの「学習」は概ね次のようなプロセスを辿る。まず問題に関わる人々による状況についての各自の「思い」を題材に当事者のグループで状況の解釈について議論し、そうした異なった「思い」を許容しながら人々のあいだに共通する「思い」を見出していく、「アコモデーション」と呼ばれる、思いの共有とグループとしての「思い」のモデル表出の作業を行う。次に、この「思い」の表出モデルを使ってグループの「思い」と現実の状況との比較・擦り合わせをすることで、その差異から実感を伴う現実把握（学習1）が行われる。これをもとに、グループ（組織）の性格や問題となる状況がおかれている社会的環境などを考慮に入れた「文化的に実行可能」なアクションプランを協働で策定する。当事者達は策定したアクションプランを現実の問題状況の中で実践し、実践行為を通じた学習（学習2）を引き出す。この行為による学習を通じ問題状況に改善をもたらすと同時に、テーマに関する新たな「思い」が触発され、次のアコモデーションのステージへとつながっていく。こうして、SSMでは集団による組織学習を通じて問題状況の変革を図るとともに、円環的に継続する学習のプロセスのなかで個々の当事者が自らの見方、考え方を変革していく。

SSMでの学習サイクルの具体的な手順は図1に示したように7つのステージからなるが、ここでは紙幅の都合から各ステージについての詳細な記述は省略する。それぞれのステージには一定の方法上のルールにより定められた活動

が割り当てられているが、必要に応じ前のステージに立ち戻ることが推奨される。これは後述する「思い」の共有のモデル、さらに作成されたプランが実感を伴ったものになっているかどうかという、アクチュアリティとしての現実を学習プロセスが反映していることの確認が必須となるためである。

6.3 SSMと内部記述の親和性

具体的にSSMがめざすのは、当事者として対象となる状況に行為的に関わることで得られる学習を「経験的知」として表現していくことであるが、内山（2007）によれば、この学習の前提となるのが、実証的なアプローチでは捨象される、当事者による状況の主観的な意味づけである「思い」の現実としての受容である。すなわち、SSMでは我々が行為を通じて状況に関わるとき自己と世界のあいだに触発される「思い」を現実のひとつの位相ととらえ、この現実としての「思い」である「アクチュアリティ」の表出モデルを対象となる状況について表現することで、システムにおける生成プロセスを「公共的に追跡可能」とするのである。⁽⁴³⁾

内山によれば、アクチュアルな現実としての「思い」とは、人が現実世界に行為者として関わるときに「生の直接的な現れ」として「自分と現実世界とのあいだに現れてくる」ある感覚であるが、それは明確な意味を伴わない、意味生成以前の自己と世界についての認識である。⁽⁴⁴⁾ この「思い」は、あくまで世界との関わりの中からもたらされるのであり、個人に内在するものではない。それは、ちょうど「モノが語りかけてくる」との表現に表されるような、自己と世界のどちらにも属さない状況についての自覚をさす。⁽⁴⁵⁾

ここに描かれた、行為にもとづく世界との関わりを通じた状況把握の契機としての「思い」の表出は、対象の存在が事前に確定論的には特定されないかたちで自己との相互作用の中に感受・同定されるとする内部観測の様相を表している。内山が「行為主体と状況のあいだの場で起こる、生の無媒介直接的な自己触発」⁽⁴⁶⁾と形容する「思い」の生成プロセスは、事後的な

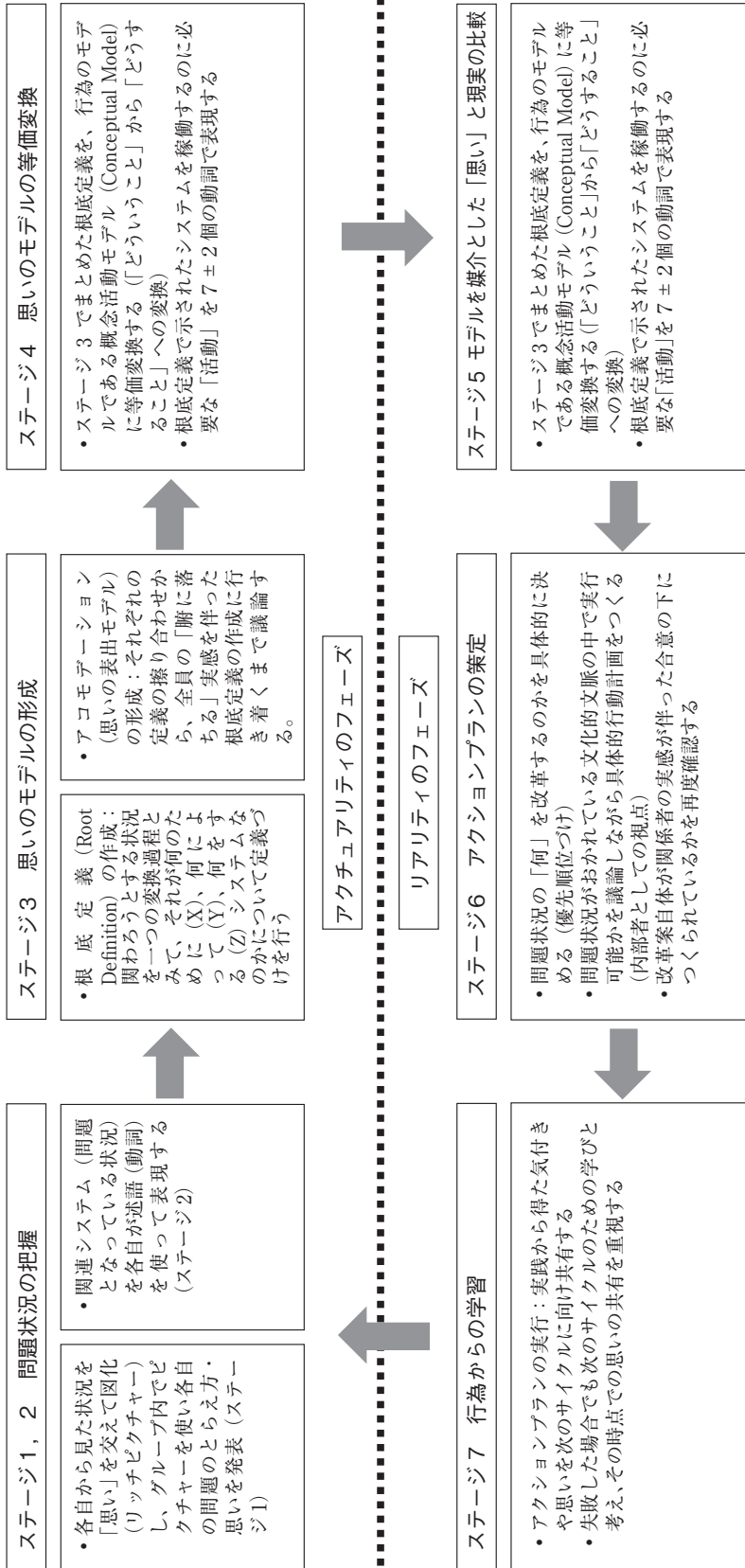


図1 SSMの流れと各ステージの活動内容 (内山 2007, pp.338-372を参照し作成)

反省から得られる知識とは位相を異にする、行為と直結した個別の局所的な状況把握としての内部観測そのものである。郡司（1997）が述べるように、内部観測とは、ただ一つの意味に確定されたと信じられていたものを、それによって「含意」され、それから「触発される想起、行為を示す」ものへと変える作業なのである。⁽⁴⁷⁾ こうしてもたらされた「思い」は、世界における自己の位置づけが反省という知的過程によらず直接的に自らの内に映し出されるとする、「場」による状況への意味づけの記述と見なしうる。

6.4 「思い」の共有モデルとしてのアコモデーションと「場」の記述

上述のとおり、SSMにおいては関わりとうとする状況の一つの変換過程とみて、心的現実としての「思い＝アクチュアリティ」をベースにした行為的学習が行われるが、この「思い」としてのアクチュアリティは、その共有とグループとしての思いの表出の過程である「アコモデーション」を通じ問題に関わる複数の行為者によって共有されることで、集合的な「思い」として収斂し全体のあるべき方向性を生み出していく。この「思い」の共有プロセスである「アコモデーション」は、具体的には当事者間での個々の状況認識としての「思い」の表出とその擦り合わせによってなされるが、これはディベートのような論駁による一意的な意見への統合ではなく、「本音」での議論を通じて共通なビジョンとしての純粋性を高めていく作業である。

内山（2007）は、アコモデーションが成立するのは、個人の「思い」が人称化される以前に存在する「アクチュアルな場」が共有されているからだと説明するが、その理論的根拠を木村（2001）のいう、間身体的に個人を超えて他者と共有される「私的間主観性」⁽⁴⁸⁾ のはたらきに求めている。すなわち、アコモデーションとは、「個別化された私的間主観性」を本音でぶつけ合い、擦り合わせることによって、「『個別の壁』が取り払われ、アクチュアリティに触れたとき」に生まれてくるというのである。⁽⁴⁹⁾ ただし、このことは個人の存在が集団

に吸収・同化されることは意味せず、現実世界に処する個々の世界観は保持しながら、アクチュアリティのレベルでの共有部分を見出すことをさす。⁽⁵⁰⁾

清水（2000）は、「場」のはたらきのうちにある個人間には身体レベルでの生成のリズムの引き込み（entrainment）による同調作用が起きており、これが個人間に共有可能な自他非分離的な自己の領域を生み出すとしている。⁽⁵¹⁾ SSMでいう「アクチュアリティ（思い）を共有した上での個人の異なった世界観の同居」⁽⁵²⁾ としてのアコモデーションとは、清水のいう個々の要素の「絶対的多様性」を前提とした自他非分離的自己としての「場」の生成過程として置き換えられる。したがって、SSMにおける「思い」の表出からアコモデーションまでの作業は、「場」を介した個人間の関係生成のプロセスを当事者の経験、すなわち内部観測として語る＝記述することから共通の文脈を創出することと見なすことができる。

7. 異文化間の「場」による関係生成プロセスの記述法としてのSSMの位置づけと限界

7.1 多文化状況における「場」の記述法としてのSSMの原理的適合性

これまで、「場」における自律的關係生成と共創のプロセスの記述にあたっては、記述者自身が当事者として関わる状況の内部観測にもとづく内部記述が求められること、そうした内部記述の性格に対し、当事者による行為的関わりを通じた状況の記述を内包するソフトシステム方法論（SSM）が方法上高い親和性を持ち、その成り立ちも「場」による関係生成と共創のあり方と原理的に整合することを示すことで、「場」のはたらきを生成的な視点から記述する具体的方法論としてSSMが有力な選択肢となりうることを説明してきた。最後に、SSMを実際の異文化間での「場」を介した関係生成に適用する際に想定されるメリットと限界について論じておきたい。

第1節で述べたように、「場」による関係生成は、「場」の作用が生命体としての人間に普遍的にはたらくものであること、さらに、「場」

の生成を取り持つ情報が非記号的な情報であるため文化固有の記号体系の制約を逃れうることから、文化的境界を越えて起きうると期待される。このことは、「場」の作用の記述法としての内部記述の具体的方法論であるSSMが異文化間の文脈にも原理的には適用可能であることを意味する。

この「場」による関係生成への原理的適合性に加え、SSMでの集団的な「思い」の共有と表出である「アコモデーション」が、個々の当事者の異なった世界観の同居を許容することから、SSM自体が文化的多様性をもつ集団への適用を前提としており、多文化集団での協働を通じた共創とその記述への具体的方法論を提供しうものと考えられる。⁽⁵³⁾

7.2 「場」の記述者としての研究者の位置づけと記述のあり方

アクションリサーチとしてのSSMにおける作業上必要な情報とは、実証的アプローチで求められる理論・仮説の妥当性の検証のための客観的データではなく、当事者が問題をどう見ているかを表す「思い」の記述である。記述者はそうした「思い」を状況、システムの状態を映した「場」の情報の反映として表現（記述）していくことになる。

ここで、関係生成と共創のプロセスとしてのSSMでの学習プロセスを記述する研究者のおかれる位置とはいかなるものか。それは、内山（2007）も言及するように、研究者自身が当事者と「思い」を共有し行為的学習に参画するなかで学問的アカウントを獲得しようとする点で、一般の観察者の立ち位置とは異なる。そのうえで、学習プロセスへの研究者としての参画のあり方として考えられるのは、学習プロセス全体を通じ議論と発表などのタスクのファシリテータとして介入しながら、それぞれの段階でのアウトカム（産出物）を「思いのモデル」の表出の痕跡として記述していくことである。⁽⁵⁴⁾

その具体的方法として、研究者自身の問題への構えとしての「思い」とあわせ、当事者達の議論から生み出された「何の問題」なのかという問題の設定についての認識が当事者の中で

う変化したかを、学習プロセスで生み出された「リッチピクチャー」、「根底定義」、「概念活動モデル」、「比較表」⁽⁵⁵⁾などの材料を当事者達の問題認識を見定める手掛かりとして、各ステージ及び全体のプロセスの前後で比較検討することが考えられる。その際、内山も指摘するように、記述が事実としての結果の記述のみに終わったり、逆にアクチュアリティだけの思い込みの記述にならぬよう、内的現実としてのアクチュアリティと外的現実としてのリアリティとの関連づけが記述に反映されていることが求められる。⁽⁵⁶⁾

特に多文化状況で行われるSSMによるリサーチでは、内的現実と外的現実のとらえ方の相違からアクチュアリティとリアリティの関連づけの論理が当事者の文化背景ごとに異なる可能性がある。ファシリテータとしての研究者はそうした世界観の相違も考慮に入れた学習プロセスのマネジメントを行う必要があろう。

7.3 SSMにおける内部記述と記録との整合性

前項で述べた研究者の位置づけと関連して、内部記述と記録との整合性をどう確保するかという問題についてコメントしておく。先に議論したように、内部観測としての「思い」の記述は事後の反省的記述ではない内部記述である必要がある。一方で、手段は何であれ現実起きた観測を研究の対象とするには何らかの形で記録に残す必要があるが、「記録」とは確定した事項の記述すなわち外部記述の内容である。この論理上のギャップをどう埋めるかという問いに答えねばならない。

これに関し松野は、出来事の全体的な外延量に関わる完了形の記述と、局所的な観測の直接的記述を完了形で表すことを区別し、前者が反省的記述に当たるのに対し内部観測にもとづく内部記述は局所的完了形である後者によりなされうことを指摘する。⁽⁵⁷⁾ 同様に、内山は、SSMの各段階で産出される「思い」をベースにしたアウトカムを、生成的变化としての学習の痕跡ととらえ記述していくことを研究の基本的方法として提示している。⁽⁵⁸⁾ このことから、

SSMにおける局所的記述としての、各段階で産出される思いの表出のモデル、概念活動モデル、アクションプランといったアウトカムは、内部記述としての有意性を留保していると考えられる。そのうえで、これらの記述を「場」による関係生成と共創のプロセスの記述として具体的にどう位置づけていくのか、その翻訳作業のための体系的ルール作りが必要である。異文化間においては、そうした局所的な記述がなされうる局面を見極めるための基準を研究者自身が設定するうえで、具体的にどのような事象をとらえて記述すべきかについて、研究者自身の文化的バイアスを最小化した多角的な視点が求められよう。

7.4 異文化間の関係生成の記述におけるSSM適用の限界

考察の最後に、「場」の記述法としてのSSMを異文化間の文脈に適用するにあたり想定される、限界と課題を挙げておきたい。まず、SSMが当事者による本音としての「思い」の表明にもとづく真剣な議論を前提とすることから、その効果は活動の趣旨と参加者の参加動機に大きく左右されることになろう。そのため、適用の対象となる案件の性格によりSSMに馴染みにくいものがあり得る。例えば、単に異文化間の友好やアトラクションを目的とする活動にSSMを適用した場合、参加者からは過重なコミットメントを求められていると見なされる可能性がある。したがって、適用対象は、多文化状況での組織運営やプロジェクトのマネジメントなど、当事者達の共通の問題意識と包括的な協働の必要性が存在する状況に限られると考えられる。

第二に、SSMは「思い」の共有、プランの策定と実行、振り返りからの新たな学習サイクルの設定という長期にわたる継続的学習プロセスであるため、即効的な結果を求める状況には適用できない。これは異文化間に限ったことではないが、特にマネジメントに関わる問題にも即時的解決を求める文化の出身者が絡む場合、そうした分子をどう活動に取り込むかは大きな課題となろう。あわせて、問題の定義という作

業を最初の重要なステージとして置くSSMの手順に対し、自明な問題と達成目標のアプリオリな存在を問題解決への必要条件ととらえる文化の参加者には、視座の転換を図る努力が必要となる。

第三に、言語の問題がある。SSMでの情報共有手段の中核はディスカッションであるため、一定のコミュニケーション力をもつ言語コミュニケーションが担保されていることが必須である。当事者達には、自分達の思いを正確に伝え、ディスカッションを通じ共通の見解を練り上げていくというSSMの活動要求に見合う共通言語の運用力が必要となる。

内部観測理論同様、SSMは未だ完結した様式を持たない発展途上の方法論である。今後、SSMを異文化間という文脈に用いるにあたり、こうした課題をいかにクリアしていくかについて、それぞれの研究者の創意にもとづく具体的方法論の創出が求められる。

【註】

- (1) 例えば、浅井(2006)、Bennett & Castiglioni (2004)、林(1994)など。
- (2) 清水は、生命要素がそれを包摂するシステムの全体としての表現と、そのための各自の表現(振る舞い)をシステム内の他の要素の表現と整合的になるよう自律的に創出していくことをあらゆる生命単位に共通する基本的性質としたうえで、そうした要素間の共創の例として個体の発生における分化や、器官の再生を挙げ、同プロセスに見られる細胞間の自律的な機能分担とシステム全体としての機能の創出・再生が可能となるのは、各要素の振る舞いを全体的文脈の形成に向け限定する拘束条件としての「場」がはたらくためであるとする。(清水 1999, p.135)
- (3) システムが全体としての表現を生み出すには、システムを構成する要素の振る舞いの間に整合性が成り立っていることが条件となるが、そのためには、無限定な選択をもつ個々の要素の振る舞いを全体的文脈に合うよう限定していく作用としての拘束条件が必要であり、生命要素は自らこうした拘束条件を生み出せる点で単なる物質と区別されると清水は指摘する。(清水 1999, p.136)

- (4) 例えば、野中・紺野(2000)、伊丹(2005) など。
- (5) Polanyi(1966) は、事象の認知や創発的行為の過程には言語化や図式化できない統合的プロセスが存在するとし、その方法知として暗黙知(tacit knowledge)を想定した。
- (6) 清水(2000)、p.107参照。
- (7) 例えば、露木(2003)、西口・ボーデ(2000) など。
- (8) 佐藤(2008)、pp.33-62
- (9) 西口(2000)、p.79
- (10) 西原(2010)、p.88
- (11) 三宅(2000)、p.350
- (12) 前掲書、p.373
- (13) 三宅は両者の違いを、スポーツにおける選手と解説者の立場の違いになぞらえて説明している。(三宅 2000、p.373)
- (14) これについては、本稿第6節で詳述する。
- (15) こうした、システム全体との関係性に立った自己の認知と自己の表現の創出を清水は「場所的自己言及」と呼ぶ。一般に、自己が自己を語ることで起きるとされる自己撞着(自己言及のパラドクス)が生物に起きないのは、生命要素が個としての存在と自他非分離な存在という二重の存在形態をもち、これらを循環的に機能させることで、場所の中に自己を位置づける形で自己を定義できるからであるとする。(清水1996、pp.59-64)
- (16) 清水はこうした非線的なプロセスを経ながらも全体としての表現に収束していく情報を「ホロニック情報」と呼ぶ。(清水 1999、p.52)
- (17) 清水(1996)、pp.67-71
- (18) 清水(1999)、p.72
- (19) emic, eticとは、本来は言語学上の概念であったが、前者を専ら当事者達自身の文化内で適用する行動や言語の内在的意味に関する記述、後者を特定の文化の範囲を超えて当てはまる記述をさすものとして社会科学に应用されている。(佐藤 2008、p.32)
- (20) 「内部観測」とは、もともと複雑系における要素間の相互作用を通じた自己組織化現象などの物質的現象を局所的構成主義の立場から説明するために導入された概念であるが、松野は生物の局所的行動と生態システム全体との関係を論じるうえでの、確定論的存在論に対抗する軸として内部観測の理論を導入している。(河本・松野 2002、pp.122-130)
- (21) 松野(2000)、p.8
- (22) 前掲書、p.8
- (23) 前掲書、p.10
- (24) 前掲書、p.13
- (25) 前掲書、p.14
- (26) 松野(1997)、p.87
- (27) 前掲書、p.86
- (28) 松野(2000)、p.19
- (29) 松野(1997)、p.86
- (30) 前掲書、p.94
- (31) これについて郡司は、一見客観的と見える「チョウが花の蜜を吸う」という言明においても我々が我々の感覚で理解する〈蜜を吸うこと〉なくして「蜜を吸う」を理解できないことを例として挙げている。(郡司 1997、p.108)
- (32) 辻下は、現実の「観測」がすべて内部観測を内包することを次のように例示する。「猿を使った実験をした場合、猿と実験者は仲良くなるそうである。論文に掲載されるわずかな研究成果の周りに、その猿との無数の思い出が実験者の心に残ると想像される。それが内部観測の様相を象徴していると思われる。」(辻下 1998、p.183)
- (33) 松野(1997)、p.81
- (34) 前掲書、p.81
- (35) 辻下(1998)、p.182
- (36) 河野(2011) はこれを身体性による内部感覚の統合と表出のプロセスとして説明する。
- (37) 内山によれば、アクションリサーチとは「研究者が問題状況にいる人々と共に協働して、研究者自身がある役割を担って状況そのものにかかわることによって状況自身を変えていこうとするもの」である。(内山 2007、p.334)
- (38) 内山は、SSMが生きるのは、実証主義で扱うような客体化可能な事象である「モノ」の次元ではなく、問題に関わる人間の「思い」である「コト」の次元に関わる学習が求められる案件を対象とするときであるとし、行為を通じて触発され共有される現実の「コト」的側面であるアクチュアリティに学習の焦点を当てることの意義を強調する。(内山 2007、pp.3-31)
- (39) 内山(2007)、p.338
- (40) 前掲書、pp.334-335
- (41) 前掲書、p.101
- (42) SSMでは、一般にsystematicと形容される部分の集合体としてとらえたシステムのはたらきとは異なる、単なる部分の集積機能ではなく全体としての創発性を生むシステムのあり方をsystemicと呼んで両者を区別する。(内山 2007、p.12)
- (43) 内山(2007)、p.34

- (44) 前掲書, p.93
- (45) 内山は、日本語の「～と見える／思われる」のような中動態による表現をそうした非人称的な自己感覚を象徴する例として挙げる。(内山 2007, p.82)
- (46) 内山(2007), p.113(傍点原著者)
- (47) 郡司(1997), p.110
- (48) 内山によれば、木村(2001)は現象学で一般に扱う間主観性が複数の個人の主観の公共性についての説明概念であるのに対し、メルロ＝ポンティの間身体性のようにさらに私的な文脈で実感される間主観性の存在を「私的な間主観性」として説明している。(内山 2007, pp.174-177)
- (49) 内山(2007), p.178
- (50) 前掲書, p.173
- (51) 清水(2000), pp.161-162
- (52) 内山(2007), p.89
- (53) 実際、内山は異文化間接触としてのM&Aや、組織内のダイバーシティマネジメントへのSSMの応用可能性に言及している。(内山 2002, p.141; 2007, p.298)
- (54) 内山(2007), p.270
- (55) 本稿図1参照。
- (56) 内山(2007), p.283 なお、SSMによるアクションリサーチの具体的実践例についてはチェックランド(1994)、内山(2002)に示されている。
- (57) 河本・松野(2002), p.133
- (58) 内山(2007), pp.168-169
- 【参考文献】**
- 浅井亜紀子『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』ミネルヴァ書房 京都 (2006)
- 伊丹敬之『場の論理とマネジメント』東洋経済新報社 東京(2005)
- 内山研一「南アフリカにおける『参加型組織』の形成を目指して：ソフトシステムズ方法論(SSM)による『信頼感のあるチーム作り』のreflection」『経営論集』第4号 pp.105-158 (2002)
- 内山研一『現場の学としてのアクションリサーチ：ソフトシステム方法論の日本的再構築』白桃書房 東京 (2007)
- 河本英夫・松野孝一郎「内部観測とオートポイエーシス」『システムの思想：オートポイエーシス・プラス』pp.111-158 河本英夫編 東京書籍 東京 (2002)
- 木村敏『著作集7』弘文堂 東京 (2001)
- 郡司ベギオ・幸夫「適応能と内部観測：含意という時間」『複雑系の科学と現代思想4：内部観測』pp.97-200 東京 (1997)
- 河野秀樹「共空間内〈場〉生成過程における身体性の性格と機能についての理論的考察」『目白大学人文学研究』第7号 pp.37-59 (2011)
- 河野秀樹「異文化間における共創的關係の自己組織：在米日本人へのインタビュー調査からの考察」『異文化間コミュニケーション』No.15 pp.71-92 (2012)
- 河野秀樹「文化的多様性への関係論的アプローチ：『場』の視座からの考察」『国際理解教育』第19号 pp.62-71 (2013)
- 佐藤郁哉『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社 東京 (2008)
- 清水博『生命知としての場の論理：柳生新陰流に見る共創の理』中央公論社 東京 (1996)
- 清水博『新版 生命と場所 創造する生命の原理』NTT出版 東京 (1999)
- 清水博「共創と場所：創造的共同体論」『場と共創』清水博編 pp.23-178 NTT出版 東京 (2000)
- チェックランド, P.・スクールズ, J.『ソフトシステムズ方法論』妹尾堅一郎監訳 有斐閣 東京 (1994)
- 辻下徹「生命と複雑系」『複雑系の科学と現代思想5：数学』pp.75-226 青土社 東京 (1998)
- 西口敏宏「場への学際的接近」『場のダイナミズムと企業』伊丹敬之・西口敏宏・野中郁次郎編 pp.65-96 東京 東洋経済新報社 (2000)
- 西口敏宏・ボーデ, A.「場と自己組織化：アイシン精機火災とトヨタ・グループの対応」『場のダイナミズムと企業』伊丹敬之・西口敏宏・野中郁次郎編 pp. 97-124 東洋経済新報社 東京 (2000)
- 西原和久『間主観性の社会学理論：国家を超える社会の可能性[1]』新泉社 東京 (2010)
- 野中郁次郎・紺野登「場の動態と知識創造：ダイナミックな組織知に向けて」『場のダイナミズムと企業』伊丹敬之・西口敏宏・野中郁次郎編 pp.45-64 東洋経済新報社 東京 (2000)
- 林吉郎『異文化インターフェイス経営』日本経済新聞社 東京 (1994)
- 松野孝一郎「統整を越える構成」『複雑系の科学と現代思想4：内部観測』pp.51-96 東京 (1997)
- 松野孝一郎『内部観測とは何か』青土社 東京 (2000)
- 三宅美博「コミュニケーションと共生成」『場と共創』清水博編 pp.339-398 NTT出版 東京 (2000)
- Bennett, M. J., & Castiglioni, I., Embodied ethnocentrism and the feeling of culture. In

- Bennett, J, Bennett & M. J. Bennett (Eds.).
Handbook of intercultural training, 3rd. ed. pp.
249-265. Thousand Oaks, CA: Sage. (2004)
- Kono, H. *Ba in the American context: An
exploration of Japanese in U.S. workplaces..*
Unpublished master's thesis, University of the
Pacific, Stockton, CA. (2008)
- Polanyi, M. *The tacit dimension*. 高橋勇夫訳『暗黙
知の次元』筑摩書房 東京 (1966)